



年 頭 所 感

会 長 小 野 勝 次

若い学問であった OR も、やがて華やかな青春を迎えようとしているかに見えるのは、新年早
早、ご同慶に耐えない。わが OR 界の昨年までに印した足跡もさることながら、明年は IFORS-
TIMS 国際学会をわが国において開催する運びになっている。主催国としてこれを立派にやり遂
げるばかりでなく、わが OR 界の大躍進を期待するしだいである。この機会に、わが OR 界の現
状に対する見解と、将来に対する希望とを述べたい。

欧米よりはいささか遅れてスタートしたと思われるわが OR 界が、OR の創設者達が創り出し
た理論、さらには非常に目新しかった多くの手法を取り入れ、紹介し、またその応用をはかった
ことは当然の行き方であった。ORに限らず、目新しいものをいち早く取り上げ、消化してわが
ものとし、遅れをとらずに利用する能力は、わが国民独自のものでもある。これは、けっして卑
下すべきことではない。私も、わが国独自の OR の誕生を心から望むものではあるが、また、わ
が国独自のこの能力を十分に活かすべきでもあると考えている。

ORはその性質上、大学で代表される学界人と、企業で代表される業界人によって、同時に取
り入れられ、協力して研究を進められてきた。しかし、吸収を中心とした協力においては、とか
く分業的な協力になるのも自然の成行きである。分業的協力は、相互の仕事の基本問題を完全
には理解しないでも進められるので、ともすれば離反的になる。感情問題などは全然なくても、相
互の基本問題を十分に理解されないまま進む結果は、お互いの仕事の本質がわからなくなって
しまう。私は、わが OR 関係者の間にも、このような事態が起こることを心から怖れている。

ORのような仕事では、かなり高度な技術的部分があって、その部分に専念したものでなけれ
ば完全な理解に達することができないのはやむをえないことである。このような部分の理解を、
そこを手がけなかった他の協力者に要求すべきではない。

しかし、創造的研究に協力して成果を挙げるためには、少なくとも相互の基本問題は完全に理
解しなければならない。細かい技術は分業的に理解するとしても、基本問題に関しては完全に理
解し合うという状態こそが、ORにおける学界人と業界人との協力形態として最も望ましいと私
は考えている。

わが学会において、学界人会員も、業界人会員も、それぞれ着実な地歩を踏み出していること
を喜ぶが、今後はさらに深い相互理解の上に立つ本格的協力によって、ORの青春を謳歌し合う
ことのできる日がくるのを心まちにしているしだいである。



編集委員長 宮 沢 光 一

1974年の新春を迎え、まず思うことは、IFORSそしてTIMSと続く東京・京都での国際会議がもう来年に迫ったという緊迫感で、会員諸氏はいうまでもなく、広く各方面からのご協力・ご授助なしにはやっていけない国際会議である。そのためにはORの効能といったものを説明もし、宣伝もしなければならないが、われわれOR学会員としても、とくに新しい年を迎えるに当たって、ORの真価はなんであったのか、またなんであるべきかを改めて熟慮・再考し、今年の新しい研究・活動の方向を見定めることは、元旦の計としてもあながち無駄なことではないであろう。

ORは問題意識をもった人々の現実認識から始まるのではなからうか。その認識の体現された形式がモデルとよばれている。したがって、このモデル構成が現実世界を十分よく反映したものでなければ、そのモデルについていくら精緻な数学理論を展開してみたところで、所詮それは応用数学ではあってもORではないであろう。またそうしたモデルについて、最新の高速計算機を駆使して、いくら計算——シミュレーションによるうとなにによるうと——してみたところで、所詮それは計算機の濫用にすぎないであろう。

複雑な現実世界の本質的諸関係を反映しながらも、操作可能なモデルを構成していかなければならない。従来のORモデルといわれていたものが、えてしてlocalな局面に限定されがちな傾向をもっていただけではなからうか。たとえば生産過程の分析にしても、ある制約条件の下で自由に使えるinputを用いて、最大の効果をもたらすoutputを得るための方法が検討されている。しかし効果というのは、単にnetの利益というような金額のみで評価できるのであろうか。またoutputとしては、生産担当者の観点のみから——たとえば製品として——理解され、生産過程から生じる騒音とか廃棄物などはoutputとして理解されてはいなかったのではなからうか。こうしたoutputは、さらにはinputの可能範囲にも影響を与えてくるであろう。こうした認識に立つとき、ある生産方法の価値評価の問題が改めて反省・考察されなければならないであろう。

従来のORモデルがはたして現実世界の深い認識に立つものかどうかを反省し、現実の本質に接近する努力を怠っているならば、ORは単なる数学遊戯にすぎないという批判に屈しなければならないであろう。ORがトップ指導層から受け容れられ難いことを嘆く前に、ORそのものを反省してみる必要があるのではなからうか。広い視野に立ち、寛容な態度で現実世界を熟視したいものである。そこからこそORの真の発展も期待できるのでなからうか。

会員諸氏のご多幸と本学会誌のいっそうの充実を祈りながら。